

東京都美術館でゴッホとゴーギャン展があり、11月末にやっと出かけました。興味深い画家なので、とても楽しみにしていたのです。全部で68点もの作品、関係する同時代の画家たちの作品展示もあり、盛りだくさんで、全てを見るのは無理というものです。作品の保護のために照明を落として展示していました。作品の輝きを感じるのが難しく、その点が非常に残念でした。



タヒチの女(1899)

劣等感に苦しんでいた高校時代、私は初めてゴーギャンの「タヒチの女」(左)の絵を見て、強いインパクトを受けました。人物はにこりともしていませんが、素朴で美しい姿でした。それだけでなく、強い生命力を感じたのです。彼女はヨーロッパから見れば「未開の地」の女性です。西洋絵画の女性像に



タヒチの3人(1899) 展示

圧倒され続けてきた私には、「未開、原始、野生的」であることを肯定しているように見えて、ゴーギャンの絵が気に入りました。大地に素足で堂々と立つ姿は優美、優雅とは全く違いますが、西洋から見れば「未開地の人」を、このように描くゴーギャンの絵を美しい！と感じ、勇気を与えられたような気持ちになったのを覚えています。

ゴッホやゴーギャンはポスト印象派と言われているようで、セザンヌも含め、彼らには強烈な独自の手法、個性があって、パワーを受けます。ゴーギャンがパリを離れ、文明を離れ、原始的自然に身を置いたタヒチ時代にこそ、彼でなければ描けない、初めての人間像を描いたと思いました。それは塵から生まれて塵に戻るけれども、生かされている命を淡々と生きている姿です。ゴーギャンの真骨頂ではないかと思います。



ひまわり(1888)

ゴッホはミレーを尊敬し、貧しい労働者への共感を抱きながら画家としてスタートを切ったようで、ホットな人柄を感じずにはられません。「ひまわり」に代表される自然の風物すべての中で、命が躍動していて、見る人に呼びかけているのを感じ、心躍ります。それは色使いと見た事も無いようなグイグイと力を含めた筆致によって感じさせられるのです。二人とも日本の浮世絵の構図、色彩、輪郭線などに、新しい美の形を感じ、それを取り入れている



ゴーギャンの椅子(1888) 展示

のも興味深いと感じます。ゴッホのほうが、浮世絵や日本画により魅了されていると思いました。二人は制作に最適な、陽光溢れるアルルで、共同生活を始めたものの、すぐに破綻しました。ゴッホはゴーギャンを敬愛しますが、ゴーギャンはゴッホを理解し得ませんでした。ゴーギャンに受け入れられないゴッホはその寂しさ、孤独に耐えられないほど苦しんだと感じずにられません。

私は二人は対照的だと感じます。ゴッホの絵には、命が声をあげて叫んでいる、命がじっとしていられず、うごめいているのが感じられるのです。命の鼓動、命の輝きがあります。それは相手と共鳴したいようなエネルギーです。逆に、ゴーギャンはクールさ、孤独感が持ち味だったのではないのでしょうか。天才芸術家の研ぎ澄まされた感性と、求める世界に熱中していく狂気のような激しい探求心が、このような作品となって私たちに残されました。いずれも魅力的です。